

地域の高等学校教育のあり方に係る意見を聴く会 意見概要
<地場産業関係者、自治会>

- 日 時 平成24年(2012年)6月18日(月) 16:00~17:35
- 場 所 信楽地域市民センター会議室
- 参加者 甲賀市商工会信楽支部、信楽陶器工業協同組合、
信楽陶器卸商業協同組合、甲賀市信楽地域区長会 8名
- 主な意見 ※ 同趣旨のご意見については集約して取りまとめました。

- セラミックとデザインを一緒にするのは中途半端。分校化で町は活性化しない。学校を小さくしないで専門的な学科で活性化して欲しい。高等専門学校にしてはどうか。
- デザインとセラミックは中身が異なる。科は分けた方がよい。信楽高校で存続して欲しい。
- 先に少子化や生徒の減少、県の予算ありきは問題。甲南高校信楽分校定時制の卒業生で気まずい思いをした。独立してようやく一人前扱いになった。
- 信楽は六古窯のひとつ。観光客もたくさん来るが、市町合併で信楽の名前が消えていく。商工会も合併した。高校が分校化すると、先に甲南の名前が出てくる。
- 陶芸の森や窯業試験場は県の施設なのだから、そこで勉強すればよい。普通科はいらない。セラミックとデザインでよい。
- 信楽高校を分校化すると、7割が定期利用者の信楽高原鉄道の存続に影響する。
- 昨日、信楽高校を守る会の決起集会があったが、問題は二つ。一つは甲南高校の分校化、もう一つはセラミックとデザインを一つにすること。信楽は甲南から独立校になったのに、なぜまた甲南の分校とするのか。セラミックとデザインがなぜ一つになるのか。セラミックの中にはデザインの部分もあるが、デザインは全く別の分野。普通科とは異なり、目的の異なる2つの専門学科は一つにならない。信楽高原鉄道は高校生が減るとやっていけない。高校分校化の次は廃校が見えている。信楽の産業は衰退しているが、どう盛りあげていくか、地域住民は高校に期待している。信楽高校卒業生には著名な陶芸家もいて母校の誇りである。分校化反対を表明する。
- 再編原案が出て、入学者が1学級分減ったと聞いている。高校生が減ると朝夕の駅前の景色が変わる。水口までの20分は大きい。学級規模は6から8学級が標準というが、甲南高校4学級と信楽分校2学級で6学級というのは単なる数合わせでしかない。もう一度考えていただきたい。
- 目先で考えると不経済かもしれないが、窯業は世界に生きている。信楽焼は信楽の土で焼くから信楽焼。5年10年は目をつぶって欲しい。レベルアップした教員を送り込んで欲しい。
- 分校化の話が出て受検生が減った。自分の子どもも3年生に在学している。自分が高校生の頃は、45人10クラスで先生との距離が遠かった。子どもは先生とフレンドリーでいろんな相談ができる、親身になってくれると喜んでいる。再編計画は大人が目線で考えている。高校教育を子どもがどう考えているか、どう思うかが大事。業界はふがいない成績だが、

信楽焼は市や県にとって大事な存在。セラミックとデザインは専門性が全く異なる。専門分野を残し、個性的な指導者を呼んでくるとか、マンガ科の創設を是非検討して欲しい。

- 卒業生だが、自分のときに独立し、信楽工業高校になった。自分の町に高校ができて、家業の関係で窯業科に入った。信楽高校は信楽焼を継ぐ、窯業に携わる人を育てる。これは甲南でなく信楽だからできる。校名は残して欲しい。生徒が少なくなったからでなく、特殊な人材を育てるために人を集めるという考え方を持って欲しい。信楽高校を存続して欲しい。デザインとセラミックは感覚的に違う。セラミックはデザインの部分も入るが、デザインは窯業と関係ない。
- 甲南高校と上手くいかないから分かれたのに、なぜ、甲南高校と信楽高校を一緒にするのか。甲南高校は薬と農業で、窯業とは話が合わない。甲南との失敗をなぜまたするのか。その前は甲賀高校の分校だった。信楽は振り回されている。信楽は窯業で生きていこうとしているが、業界は衰退している。全国から人を集めて人口を増やす必要がある。知名度のある信楽をなくすことは県にとってマイナスである。
- 少子高齢化と言いながら、なぜ石部高校をつくったのか。計画性がない。子どもが減って、減ったところからなくすというのは理解できない。
- 甲南高等養護学校はなぜできたのか。ノーマライゼーションというのなら、信楽高校が甲南高校に行かなくても、高等養護学校が信楽に来てくれればよい。養護学校を信楽に持ってきてはどうか。信楽は福祉の町。すぐには考えられないが受け入れはできる。甲南から信楽に持ってきて、陶芸をしてはどうか。そういう子は陶芸が好きだと聞いている。
- 生徒を減らすように考えているのではないか。追いつめて廃校にするのではないか。ぜひ本校として残して欲しい。地元も一生懸命頑張る。セラミック科とデザイン科の生徒を全国から集めて土台をつくる。昔は窯業の勉強をするため、多治見高校に行っていたが、信楽高校ができてからは、多治見から信楽に勉強をしに来るようになった。
- 企業や地域の要請を踏まえて、信楽高校の生徒を増やすことを考えてもらいたい。県外から生徒をどんどん集めて信楽の人材を育てるという考え方もある。隠岐島前高校の例もあり、視点を変えればアイデアも出てくる。分校にならなければ、地域や業界も頑張る。
- 専門性を高めるためには指導者のレベルアップが必要。大学や専門学校に通じる道が必要。信楽の普通科を出れば、こんなメリットがあるということを発信する。高齢者が増えるので、介護の基本を授業に入れるなど、地元に合うものを考える。いろんなことを県だけでなく地域も考える。ボランティアの考え方、地元との交流。都会は人と人との関係が希薄だが、信楽なら高校卒業だけでなく、人間的にも大人になれる。
- 要請があれば、伝統工芸士が外部講師として週に1回くらいなら行く。協力はできる。実習は5人10人でするので、40人でなければならぬということはない。
- 生徒は興味のあるところへ行く。最初は興味からで、信楽に来てよかったと思われるようにすればよい。生活をする中で信楽に興味を持つ。卒業後、信楽に触れてもらう。今は景気がよくなく生活が大変だが、みんなで活力を出す。信楽高校を守りたい。